林業とくしま

H型架線集材現場視察状況　　於：木屋平村八幡

林業指導者交流研修会

県下の林業経営士等地域のリーダー34名が参加して、林業指導者交流一泊研修会が木屋平村・池田町・山城町等で開催されました。(平成16年３月４・５日)

緑の募金

No.268
2004.3

やまびこ

私が日頃思うこと

海部森林組合代表理事組合長
三浦茂則

早いもので、家業の林業を受け継ぎ山一筋に35年、海部森林組合長に就任して5年が過ぎました。この間、世の中の大きな変化と木材業界の底知れぬ低迷期に右往左往しながらも先祖から受け継いだ山をどのように経営し、次の時代へバトンを渡せばよいのか、植林から伐採、販売、住宅、再び植林へとつながる林業の経営サイクルをどうすればよいのか、自問自答しながら無我夢中で突っ走ってきました。

私は、「木造住宅を普及するには消費者に無垢の木の長所短所(生態)を知ってもらわなければならない」と考え、まず自分自身に"木とは何ぞや?"と問いかけ、一つ一つの疑問を実験することで確かめてきました。

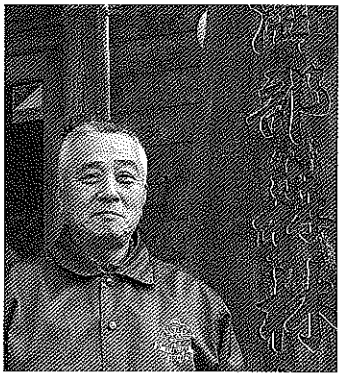
ある日、県外の買主の方から「スギ心材の色の安定を山側でできないか?」という話しがあり、試行錯誤のすえ、昔は丸太を軽くして運びやすくする目的で行われていた「葉枯らし乾燥」の技術に着目し、市場へ出したところ、重量の軽減化と心材の色の安定で付加価値が付き、買主にも喜ばれました。そこで、林業専門技術員や林業総合技術センターとの共同研究として取り組み「スギ葉枯らし材乾燥技術」として数値化することでスギ材の普及の一助となりました。

次に葉枯らし乾燥材を住宅に生かすため、県南部で昔から伝わってきた大工技術を生かし、中目材の販路拡大を目指しました。それまでの建築基準法では、スギの強度は松より2割弱いとされていましたが、昭和59年国立林業試験場で日本で初めて実大強度試験を行い、スギ70年生の材はマツ並みの強さがあることを実証し、建築基準法を変えることができました。

続いて、スギ心材がシロアリに強いと昔から言われていたことに目をつけ、京都大学の木質科学研究所へ持ち込み、直接シロアリに食べさせることにより強さの証明とデータ化しました。また、心材の中でも消費者や大工から敬遠されていた黒心材にシロアリを寄せ付けない成分である「クリプトメリオン」を多く含んでいることが証明され、黒心材の普及の朗報となりました。

最近では、徳島大学、徳島文理大学、県森林林業研究所とともに行っているスギ無垢材の抗菌性、睡眠を促す香り成分の抽出、昨年の11月には、古民家の耐震性能実験を実施しました。

このように木を科学し、数値化することで消費者に安心できる木造住宅を提供でき、木材の需要が拡大されます。国や県など公的機関や我々森林組合は、目先の事も大事ですが、未来を見据えて国産材の普及に務める必要があると考えます。



もくじ(林業とくしま 268号)

やまびこ(私が日頃思うこと)…… 2
鉄人コーナー(特殊技術・伝統芸術等の紹介)…… 3
林政の窓(「これからの林業普及指導」について)…… 4
特 集(徳島県森づくりコンクール)…… 6
林研とみんなの情報コーナー…… 8
技術情報(篤林家)…… 10
阿波だぬき…… 12
東西南北…… 13
広 告…… 15

鉄人コーナー

那賀郡上那賀町小浜
蔭野　勝則さんの紹介

蔭野勝則さんは、県下でも数少ない桶職人です。蔭野氏は昭和21年に桶職人に弟子入りし、昭和26年独立しました。それ以来、52年間桶職人として活躍されています。ところで、蔭野氏が職人として始め頃は桶の需要は多く、ご飯や漬け物に使うほかに、棺桶としても利用されていたようです。しかしながら、やがて時代の流れとともにプラスチック容器やポットなどに変わっていき、いつしか職人も県南では蔭野氏だけとなってしまいました。需要の少ない時期は昼は林業で生計を立てていた時期もあり苦しい思いもされたそうです。しかしながら、あちこちで林業の仕事を行ったことにより桶の材料となる木がどこにあるかわかるようになったようです。ちなみに、すし桶はこうやまきで造るそうですが、それ以外のものはスギを使うそうです。蔭野氏によるとスギの桶はご飯を入れるとにおいも味も変わらないで冷たくなっても美味しいとのことです。スギの木は3年間乾燥させてつくるので、平均的な桶でも1日2つくらいしか造らないそうです。注文は那賀郡だけでなく、阿南市、海部郡、そして板野郡からもあるそうです。確かに、桶を見れば竹の輪で結わえたすばらしい仕上がりで、飾り物として置いておく人もいるようです。また、つけものを漬けるには厚いスギ材の方がプラスチック容器よりも適しているようで温度差によって味が変わる事がないというので注文があるそうです。このような本物の職人が造る手作りの桶あなたもどうですか。

特殊材の伐採鉄人
日和佐町　坂本登さん

日和佐町の坂本登さんは、間伐材魚礁や指標マツの植樹など林業普及活動を支えてくれる日和佐指導区の「応援団長」のような存在ですが、本業は造林から保育、伐採、作業道開設まで何でもこなす林業家です。特に伐採においては、通常の用材生産から樹齢数百年の銘木や社寺境内の巨木から裏山の屋敷林の伐採、枝払いなども請け負う「特殊材の伐採鉄人」でもあります。

これまでに、絶壁の上に立つ直径3mを超えるマツ、胸高1mのケヤキ、地上高5mで直径50cmのクヌギ、地上高10mで直径70cmのスギなどの銘木や大浜海岸沿いの八幡神社の大クスノキの枝払い、道路擁壁のウバメガシの伐採、家の屋根に覆い被さったシイをクレーンで吊りながら伐採する、など常に危険と緊張が伴う仕事を手掛けてきたそうです。

技術面で特に気をつけることは、木の「重心」を見極めること、幹と枝のバランス、方向、重量、気象条件など様々な要因を計算した上で作業にかかることだそうです。しかし、クレーン作業中に伐採した木が風にあおられ、乗っているゴンドラに突き刺さってきた、という話しには冷汗をかきました。いかに危険を避けるか。坂本さんは、百分の1の確立を千分の1にするために気を付けていることを教えてくれました。それは、「基本に忠実」であること、これまでの経験から基本どおりの作業が最も安全で効率が良いことだと話してくれました。

当たり前のことですが、作業中の危険に遭う確立は回数が増えるほど高くなります。危険率の高い林業の現場でこそ、「基本に忠実な作業」を常に心がけたいものです。

日和佐農林事務所　井坂利章

平成16年度県産木材需要拡大のための取組について

林業振興課木材生産流通担当

【はじめに】

「徳島すぎ」を始めとする県産木材の需要の中心となる住宅の着工戸数の停滞や木材価格の低迷を背景に新たな観点での木材需要拡大策が必要となっております。

反面、住宅減税の延長や建築基準法の改正（内装材の使用制限）を契機とした追い風とも取れる状況も発生しており、平成16年を始期とする「経済再生プラン」にも位置づけられるなど森林・林業木材産業の総合的な振興を目指して更なる木材の需要拡大策を実施していこうと考えております。

【取組の内容】

新年度予算では、今まで実施してきた事業の一部を見直し「徳島の木利用推進事業」として、新たに「産地証明等の明確化による新たな木材需要の喚起」や「新築住宅で県産木造住宅の推進に加え、リフォーム等での県産木材の内装材利用」を柱として、それを取り巻く関連対策を含めて推進して行くこととしております。今回は主要事業の幾つかを紹介させていただきます。

（予算額、徳島の木利用推進事業）

「７３２，１６２千円」

○具体的には

従来から実施してきた木材の良さのＰＲについては、今年の十月に第二十八回全国育樹祭が開催される事になっており、木材業界の皆様のお力を頂きながら、この全国イベントに合わせた木材利用、特に「徳島すぎ」の普及啓もうを効果的に実施していきたいと考えております。

又、木材製品等の供給については市場からの様々のニーズへの的確な対応が求められており「県産木材の素材・製品」の産地・強度・乾燥の度合など証明・認証する体制（素材生産から利用者に至るまでの流通段階）・基準を整備していきたいと考えております。既に全国の二十三都県で類似の制度が発足しており、産地間の競争対応の意味からも早急に実施すべき事業として、本県独自の体制の整備等を検討して参ります。

木造住宅への利用促進については、施主の一層の利便性を図ることを目的に「県産材住宅資金貸付事業」の新築・購入の融資枠を拡大し（二千万円）、新たに現在ブームとなっているリフォームでの内装木質化のためのメニュー（三百万円）を追加するなど　施主のニーズを捉えた幅広い対応を実施していきます。

更に、平成十五年度実施した新築住宅での徳島すぎの柱の提供事業については、好評を博し、県産木材利用の普及定着についても一定の成果が認められており、平成十六年度については、徳島すぎの構造材の他に、内装材を追加するなど拡充し「徳島すぎ魅力向上推進事業」として拡充強化し発足いたします。

次に、県など関連公共施設において県産木材を使用する事を目標とする「公共施設における県産木材使用指針」による積極的な活動をしていくこととしております。これは、これまでの取組をしてきた公共土木事業の木材利用に加えて、全庁的な取組の方向を定めたものであり、市町村事業にもご協力を頂き、この成果により民間レベルまでの浸透・波及させるための展開を図って参ります。

更に南海地震対策が進む中で新たに耐震化施工が実施された公共施設においても、合同庁舎を利用した、耐震強化枠やそれに続く執務室の木質化を実験的に実施し、その過程で得られたデータや新製品の開発等含めて蓄積し公開するなど既存の非木造建物への波及を狙うなど、民間部門での先導的事業としていきます。

その他、森林所有者から設計・施工まで幅広い参加により組織化がされている「県産木造住宅供給システム」については、県内外で

の活発な活動がされており、それぞれの特徴を活かした住宅供給を行っております。引き続きその活動を支援すると共に県内各地でシステムの設立を検討している地域での助言等もさせていただき新たなシステムの設立により地域の県産木材需要拡大の核となるものとしていきたいと考えております。

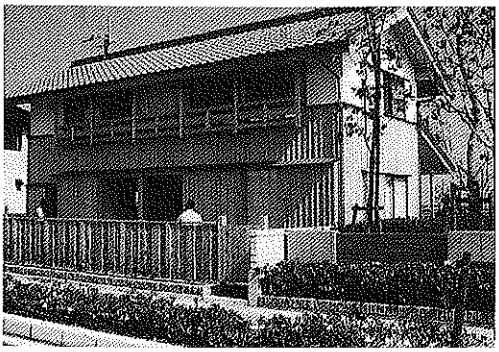
県産木材製品等の販売促進等にために、証明すべき課題や諸性能等のデータ整備については、今後も森林林業研究所を中心に木材利用の可能性の開発や試験等に取り組んで参ります。

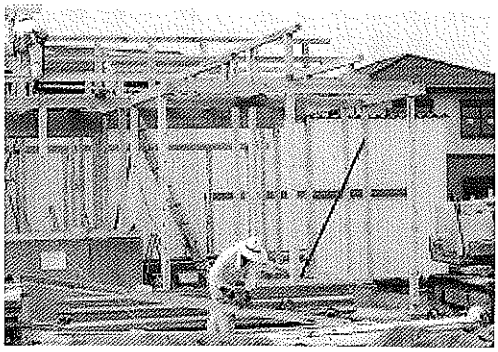
以上、平成十六年度の取組の幾つかを、簡単に紹介させていただきました。

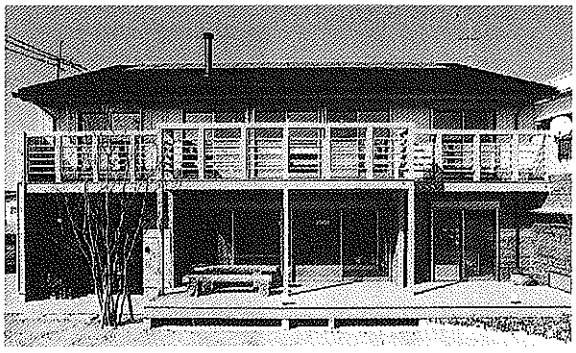
木材の需要拡大については、森林・林業・木材産業に関わる川上から川下までの関係者が、それぞれのポジションでの機能発揮や問題点を解決することが必要です。

日頃の皆様との協議等の中で今後の県産木材の需要拡大策についての点検や修正を実施して参りたいと思いますので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

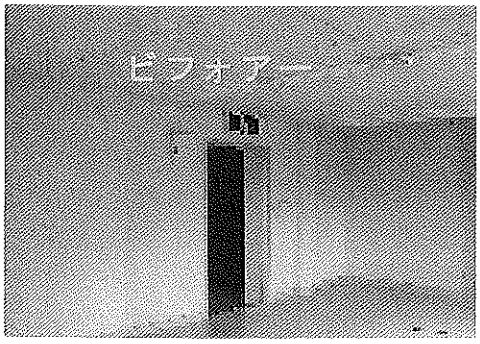
県産木材利用の住宅

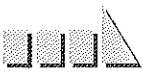


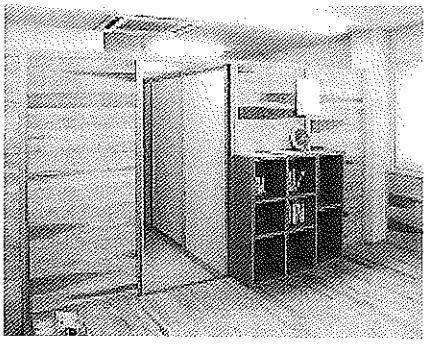




非木造建物の内装木質化の事例







徳島県森づくりコンクール

はじめに

今年も県下各地から7件の応募がありました。いずれも地域の模範として期待できる優秀なものであり、4件が知事賞に、2件が後援団体会長賞に選ばれました。

それぞれに注目すべき独自の取り組みがあるのでご紹介します。

■育林の部（枝打ち間伐）

知事賞　天田善信　木屋平村

三十六年生のスギ林で、間伐や枝打ちなどの手入れが十分に行き届いているうえ、一㌶当たり七百本という思い切った間伐がなされているので、林内がたいへん明るくなっています。

これは、間伐材をすべて販売して積極的に収入に結びつけてきた結果です。

特に間伐材は、葉枯らし乾燥を十分に行ってから搬出するなど、木材の有効利用を前提とした施業が行われています。

作業はすべて自力で行っていますが、優れた作業技術を持ちながら、採算性も追求した合理的な林業経営と言えます。

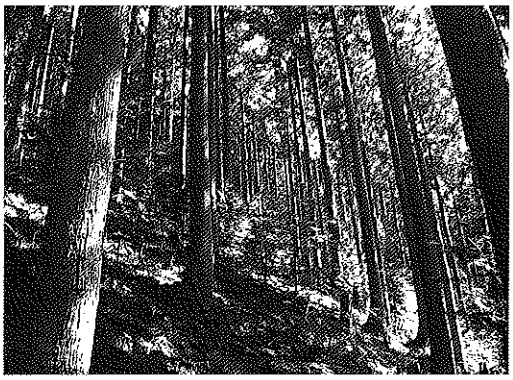
知事賞　松下　昇　池田町

上層木はスギ五十五年生、下層木はヒノキ十年生の複層林です。

西祖谷山村にある現場は、水資源のかん養や土地の保全機能を重視する「水土保全林」に位置づけられています。

複層林化によって、皆伐による裸地化を回避しながら、より収益性の高いヒノキへの樹種転換を目指しています。

間伐や木材搬出時には、残存木を痛めない技術や工夫が必要になりますが、立地条件に配慮した施業技術は優れたものがあります。



県森連会長賞　久保光徳　木沢村

四十五年生のスギ林で、四回の間伐を繰り返し、一㌶当たり九百本の密度になっています。

作業道の開設とリモコンウィンチ付き林内作業車を活用して道沿いの間伐材はすべて自力で搬出するなど、採算間伐を積極的に行っています。

森林組合の間伐作業員として身につけた高い技術力と熱意で、地域の間伐推進にの指導的役割を果たしているほか、育成天然林施業にも取り組んでいるなど、さらなる活躍が期待されます。

普及協会長賞　飯山良夫　上勝町

三十五年生のスギ林で、一㌶当たり千二百本になっています。

この低い立木密度は、将来にわたる管理経費の削減を目指して思い切った間伐を行ったためです。

作業方法も、最新の作業システムを地域に率先して導入し、スィングヤーダとプロセッサーによる列状間伐を行っています。

省力的な林業経営を追求した事例の一つとして注目すべきもので

あり、地域への波及効果が期待されます。

■森林整備推進の部（集団的間伐と低コスト化）

知事賞　林業同友研究会

会長　森口孝男　川島町

美郷村にある東山谷川下流地区緊急間伐団地の木屋浦地区は、平成十二年に五名で施業協定を締結し、約二十三ヘクタールの協定面積のうち九十五％が人工林で占められています。

その後の五年間で路網整備と間伐を行った結果、現在の路網密度は一ヘクタール当たり約八十四メートルで、間伐面積も約十七ヘクタールになっています。

特に間伐は、当初から収入を目指したので、搬出総材積は千二百立方メートルになります。

作業道を開設するためのパワーショベルをはじめ、林内作業車や小型ウィンチなどの機械も導入し、計画的な森林整備が行われています。

路網が充実したので、都市部に住む森林所有者でも四駆乗用車で現場まで通い、地力で間伐を行っています。

また道沿いに集積した間伐材は原木市場のトラックが現場まで進入してきてまとめて輸送してくれるようになりました。

集団間伐によって様々な効果が現れており、協定人数や面積のさらなる拡充と、他への波及効果が今後大いに期待されます。

知事賞　山城町森林組合

組合長　西川利男　山城町

山城町白川地区緊急間伐団地は二十六名が施業協定を締結し、面積も約六十三ヘクタールあります。

ここは平成七年度に先導的林業生産団地の指定を受けているほかそれ以前から基盤整備等を集中的に行ってきた経緯があります。

その結果一ヘクタール当たり約二百五メートルの路網密度なっており、長い歴史が築いた成果が現れています。

作業のほとんどは山城町森林組合が行っていますが、現場を熟知した人が一貫して取り組んできたことと、継続して施業を行ってきたことで、作業能率も著しく向上しています。

高密度な作業路網の効果もあいまって、平成十三年と翌年度の比較では、間伐作業員一人当たりの労働生産性が二倍以上と、劇的な効果が見られます。

団地内には、選木育林早期仕上げ間伐の展示林や、列状間伐を行った林分もあるなど、常に時代を先取りする施業技術を率先して導入し、地域の先導的役割も担ってきました。

また高校生の林業体験など、様々な講習会も開催されています。

おわりに

知事賞受賞者は平成一六年度の徳島県植樹祭で表彰されますが、これらの入賞事例が多くの林業関係者に広く認識され、林業不振を打開する起爆剤になることが期待されます。

林研とみんなの情報交流コーナー

脇町　葉枯らしスギ丸太の水分管理

平成十五年十二月、林研グループ美馬郡木材協同組合協力会が、丸太の品質管理の一環として、穴吹町の原木市場で実際に流通しているスギ間伐丸太の含水率を測定しました。測定した丸太は約三カ月間葉枯らし乾燥を行ったスギ葉枯らし材と、葉枯らし乾燥をしていない一般材の各五本でした。

はじめに重量を測定し、含水率を測定しました。その後、より正確な含水率を求めるために、丸太の中央部から五㎝厚さの円盤を切断し、乾燥器で水分を蒸発させ、全乾法による含水率を求めました。

全乾法による含水率の平均値は葉枯らし材が八三％、一般材は一三七％で、実際に流通している丸太の含水率を把握することができました。また、重量からもおよその含水率を推定することもできました。

協力会では、今後も引き続き葉枯らし材等の丸太の品質管理について検討していく予定です。

脇町農林事務所　坂田　和則

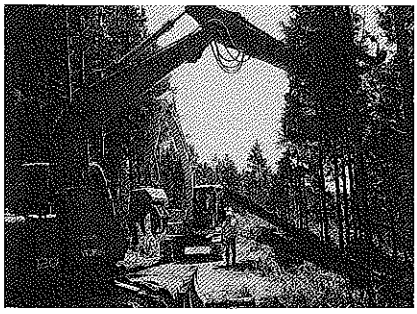
徳島　間伐研修会を開催

勝浦川若手林業研究会（会長柳瀬武志氏会員数39名）では、会員の林業技術の向上と地域の森林整備の推進を図るため、毎年会員を対象とした間伐研修会を開催しています。

今年は、2月8日に上勝町大字福原の2.5ｈａのスギ林で女性4名を含む会員20名の参加で行われました。初心者の会員に対しては、プロの林業家でもある会員が伐採を指導し、林内整理も含めて、夕方までにほぼ全山の間伐を終了しました。

勝浦川若手林業研究会は、会員の親睦と勝浦・上勝両町の基幹産業である林業の再生を図るため、特に、林業技術の習得に力を入れています。そろいのヘルメットとジャンパーで山に挑む若者の姿に、地域の期待も高まっています。

徳島農林事務所　早田　健治



池田　間伐講習会の実施について

一月二十九日に三加茂町内において間伐講習会が行われました。

この研修会は、町内の林業グループである選木士会が中心となって企画したもので、林務課、県森連、地元森林組合の指導のもと、会員外からの七名を含む計十五名が参加して行われました。

現場は、ヒノキ二十五年生、約千五百本／ヘクタールの全て手入れの行き届いていない林分で、掛かり木の処理方法の実演に引き続

き、林分密度管理図を使って適正な本数を算出し、不良木の選木、伐倒、残存木の枝打ちを行いました。

予定していた区域は昼過ぎには作業が終わり、当初は真っ暗だった林内に日が射し込むようになってきましたが、参加者はこれぐらいではやめられないとばかりに区域を広げて間伐、枝打ち作業を続け、日が傾くまで林内にチェーンソーの音が鳴り響きました。

作業を終えた後の満足そうな参加者の顔がとても印象的でした。

日和佐農林事務所林務課では、一月二十六日から二日間、宍喰町で移動式製材機の研修会を開催しました。

日和佐 移動式製材機の研修会

講師は佐那河内村の桑原健一氏ら二名で、郡内から木工やログハウス建設などの活動をしている三つの団体（日和佐町青年林業者会議、轟林業活性化クラブ、宍喰町林業後継者）の会員二十名が参加しました。

使用した製材機は組み立てや分解が簡単でユニックなしでも運搬でき、慣れればある程度精度のある製品の加工もできそうです。

県南とは言え、寒波の影響が残る寒い中、参加者も納得がいくまで熱心に機械の操作実習を行いました。

すぎやひのきの丸太から板や柱を製材しましたが、初めてにしては仕上がり具合もよく十分満足できる製品が挽けました。

今後は、木取りなどの研修会についても企画したいと思います。

日和佐農林事務所　吉永　亨

川島 搬出間伐講習会の開催

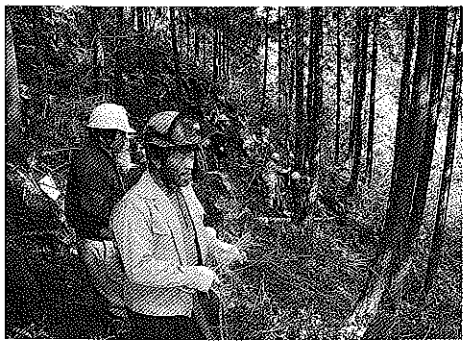
平成十六年二月二十六日、市場町大字犬の墓の大王製紙所有山林で「搬出間伐講習会」を開催したところ、阿波麻植森林組合作業班員、大王製紙の社員を中心に二〇名の参加がありました。

今回の講習会は、選木育材と林内作業車を使った間伐材の搬出にねらいを絞ったことから、選木育材については杉山宰氏の指導を頂きました。

実際に立木八本間隔の距離を測り、一ヘクタール当たりの本数を算出し、次に、四メートル間隔になるように通直木、直径級上位の木を選木しました。これにより、長伐期良質材生産への方向付けが出来ました。

次に、高岡索道工機の高岡幸夫氏に林内作業車を使った搬出の実演をしてもらいながら、作業上の留意事項について説明を受けました。途中で機械の調子が悪くなって、参加者全員が機械操作の実習をすることは出来ませんでしたが、搬出の必要性を感じている参加者が多く、説明には熱心に耳を傾けていました。

次回は、平成十六年度に同じ現場で、単線循環式を使って搬出間伐講習会を実施し、併せて収支状況調査をも実施する予定です。



川島農林事務所　宇野　元博

篤林家

徳島県立農林水産総合技術センター　森林林業研究所
森林生産担当　主任研究員
後藤　誠

はじめに

〝篤林家〟とは？いったいどんな人でしょう。

私は、3年ほど前、ある地域で〝篤林家〟の話を聞かせていただきました。その話は、篤林家を理解する上で重要であるとともに、林業経営を考える上でも大切と思われるので紹介します。

またこれらは、今後地域条件に合った林業技術を伝承、あるいは研究する上で、多くのヒントを与えてくれると思います。

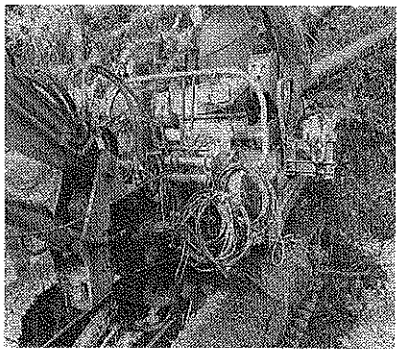
「機械」

愛媛県のクローラの運搬車を見てから、県南ではじめてクローラの運搬車750Kg積みを入れた。その後、近くの林業会社にも大型のものが使用された。

林内の作業道は1m50cm巾、昭和53年より始めた。知人からユンボを借りて、その後昭和63年に中古を50万で購入。まだ現在もフォークをつけて、土場で木材の整理・積み上げ用に使っている。そして、2台目を平成6年に460万で購入した。

作業上で、人を雇う事は大変なり。危険な作業のうえ、賃金の件など・・・・。

その点機械は安心して使用出来る。



「林業経営」

昭和30年代までは、木材の搬出・植林・下刈りなど人を雇って仕事をしていたが、自分の経営面積は少ないため、人夫賃とか家計に必要な経費を作るのに古木がだんだん少なくなってきた。それで、これでは将来行き詰まると思い、人を雇うのをやめて自分一人でやり、出来ない時だけ補完的に人を雇う事にした。

親父が、林業経営には全面積の6割以上は、いつでも金になる材を持っていないと経営出来なくなると話していた。そこで、あらためて山を見ると、みんなきれいに植林・下刈りは出来たが古い木がだんだん少なくなっていたので、これはいけないと思い1人で仕事を始めた。

そして現在、親父の理想の山造りができた。

「作業道」

作業道は6カ所で6Kmぐらい完成した。軽トラックで山の上にのぼる事で楽になった。

75才になったが歩いて登るのと違って、車から降りたら仕事場なのでとても楽になった。地域の林業会社の山も人夫さんが、とにかく道がないと仕事によういかん。昔のような元気がないと話している。

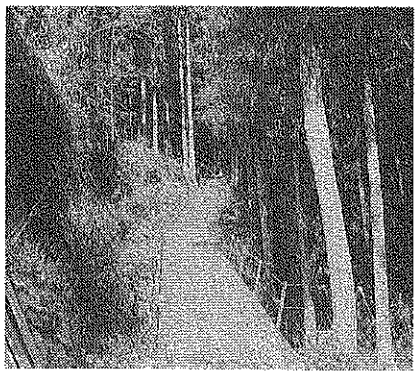
「鉄橋」

この山で間伐したらと思いつつ、道が不便で間伐出来なかったので数年前から道づくりを始めた。山林に行く途中に小谷があり、なんとか便利な道を作ろうと考えて、「鉄橋」にすれば簡単に上がれると思ってつけた。

まず、なぜ出来ないか？なんとかいい方法はないか？と考え、空想を現実にした。

見学に来られた方は危険な道と心配してくれる方がおられる。私の経験から、まずあの勾配が作業道

では限界なり。自分ながらよく出来たと思っている。



で行きました。そんなこともありました。

「用材」

家の用材について・・・・

床柱の位置が押入の右か左か？この地域では床柱に12の年輪を表す風習があり、家を建てる方から用材（原木）の注文があって出した。

家の構造が十分に分かっていないといけない。柱、梁、母屋、通、大引、タルキ、八つ板、軒、桁、これらの大きさにより原木の大きさを決める。

また、伐採の時期は1年に5回から6回に限られる。「つち」の時期があり、この時の伐採は絶対いけない。壁作りに細い竹をあみ込むが、時期が「つち」であれば何十年かして見ると、外はきれいだが指でつまんでつぶれるほど中は、虫の糞粉ばかり。

「つち」の間は、水が止まっている時期、大自然に逆らえない不思議な時期である。

「種と苗」

スギの実とりは、山の高さの6―7合以上で取る。方位は関係なく高いところの木は、中の色が良い。山裾や谷の近く、又は水分の多い所は中の色が黒いところが多い。

昔の人は、実をとる木の根を掘り、噛んでみてキガ（黒色で味はにがい）が多いといかん。そんな事をして良い実を取っていたとの事。

良い種で苗作り、植林すると花粉がとても少ない。場所、場所で違いあり。

さし木が良いと言って、親父が日田から買って・・・。あんな失敗ない。

やはり、その土地の穂木で作らんとダメだ。現在、この林が困っている。

「継承」

息子は、中学校を出てから、親父・私・息子と3代で山へ行っていたが、ある時息子が土木に行きたいといった。

それから約25年、土木会社勤めの息子が平成6年に退職し我が家の林業へ。しかし、林業が下り坂になった現状では、親子2人がとても生活出来ない。林業が下り坂なので、しばらく林業会社で修行せよと言って、林業会社へ入社した。

そんな息子も、日曜日には、時々手伝ってくれる。

孫は、徳島の自動車会社に勤めているが、アルバイトにチェンソーで除間伐にくる。孫も伐採が少しうまくなった。

時々、親、子、孫と3人、3代で山仕事をしている。今時珍しい景色というか。

おわりに

最後に、森林林業百科事典1)によると、〝篤林家〟の項目に引き続き、次のようなことが書かれています。

しかし、〝篤林家〟にあっても、戦後の拡大造林を担った世代がリタイアし、世代継承の時期を迎えた場合、林家が世帯として林業後継者を確保し、林業経営を継承しうるかどうかという点で困難な問題に直面している。・・・・（略）・・・・、今後、林家の継承問題は持続的な林業経営の確立を展望するうえで、林家の再編方向を含めて検討される課題である。

「地球温暖化？」

徳島農林事務所林務課長
村田光彌

地球温暖化の進行で、今年も暖冬かと思っていたら、急に寒くなった。温かい日は極端に暖かく、寒い日と暖かい日が交互にやってくる。昔は、寒いときは、ずっと寒くて、暑いときは、ずっと暑かった。それでも、体がじっくり慣れていってそれなりに環境に適応していったものである。小学校などでも、必ず1人くらいは、真冬でも半袖半ズボンで登校してくる子供がいた。しかし、最近は、このような薄着の子供をあまり見かけない。寒さに慣れる前に気温が上下してしまうせいではないだろうか。あるいは、親の教育観が変わったせいかもしれないが……

20年前の1983年の年末年始と2003年の年末年始を比べてみると、概ね4度の差がある。やはり昔は寒かった。また、2003年の12月は、6日から8日にかけて14．9度から7．5度、18日から20日かけて8．8度から3．7度、25日から27日にかけて10．7度から5．4度、と3回も5度以上急激に気温が下がっている。また27日から30日にかけては、逆に3日で5．3度も気温が上がっている。これには、人間はもちろんだが、植物や野生生物にもそれなりに苦労しているのではないのではないかと思う。

山村では、ここ数年、「シカ」と「サル」と「イノシシ」の話で頭が痛い。特に、「シカ」は、林業にとってきわめて重大な害獣になっている。シカが増えたのは、地球温暖化が原因という説がある。暖かい気温が子鹿の死亡率を低下させ、ねずみ算式に数が増えているという説である。冬はやっぱり寒い方がいい。地球温暖化防止のために林業の振興と木材需要の拡大が期待されている。

東西南北

脇町　森の案内人　搬出間伐を行う

森林を県民に分かりやすく解説する森の案内人が、自らの研鑽と合わせ、森林整備に一役買おうと搬出間伐を行いました。

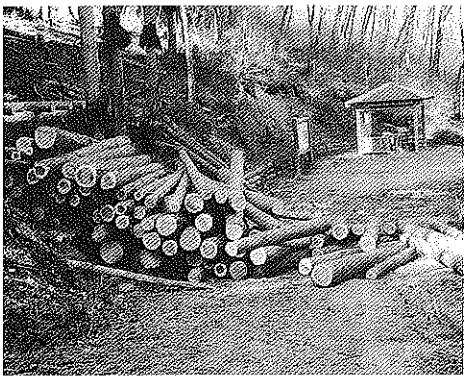
搬出間伐を行ったのは、森の案内人の佐藤久夫さんら6名です。

場所は、穴吹町古宮のスギ約三十五年生の民有林で、面積は二ヘクタールです。平成十五年八月から十二月におけて行い、多いときは六名、少ないときは二名で、伐採、玉伐、枝払い、搬出までを自分たちで行いました。搬出材積は、八十立方メートルであり、美馬郡木材協同組合や三好木材センターへ出荷しました。

搬出は、人力による引出し、ひっぱりだこ、単線循環式索道を用いて行いました。伐採、造材方法などについては、地元林業経営士の谷氏の指導を受け、単線循環式索道も同氏に依頼しました。

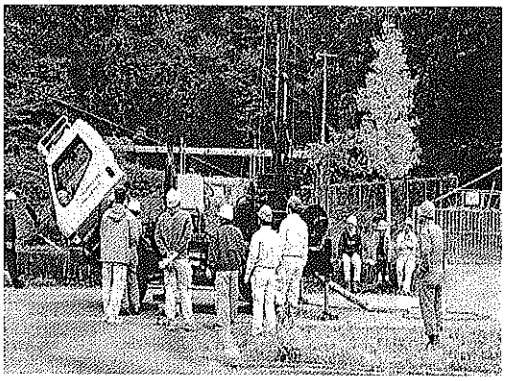
今回実際に自分たちでやってみて、伐採、造材のやり方、市場での取引関係など、非常によい勉強になったとのことでした。

脇町農林事務所　徳永　章



徳島　「タワーヤーダメンテナンス研修会」を開催

徳島農林事務所では、列状間伐を主体とする効率的な搬出間伐に対応するため、11月27日、28日にタワーヤーダのメンテナンス研修会を開催しました。徳島中央森林組合が所有するリョウシンタワーヤーダを使った研修では、宮城県から招いた技術者の指導により、各種バルブの油圧調整、ワイヤ張力の測定、アウトリガバルブの分解調整などを2日間に渡り実施しました。調整の結果、徳島中央森林組合のタワーヤーダは、十分な能力を発揮することが確認され、今後の搬出間伐の推進に期待が高まっています。研修には、徳島中央森林組合の他、(株)山城もくもくなど、タワーヤーダを所有する事業体の関係者、重機のメンテナンスを行う事業体からも参加があり、県下の林業機械技術者の情報交換の場としても意義あるものとなりました。列状間伐を行うことにより、タワーヤーダの生産性は大きく向上します。厳しい林業情勢の中ですが、とにかく出材を行って、川下の木材加工業との連携を持たないと徳島林業の未来はありません。搬出間伐を推進しよう!!



徳島農林事務所　早田　健治

池田　西井川小学校で森林教室

昨年12月1日に西井川小学校の主催により森林教室が行われ、5年生児童12名が参加しました。会場は西井川林研の設置した里川炭窯で、西井川林研の方々と林務課の職員が講師を務めました。

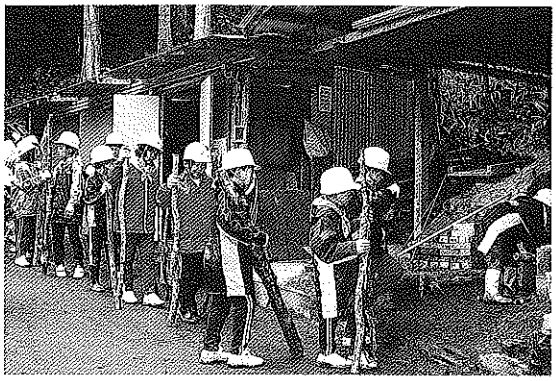
森林の果たす役割や機能などについて授業した後、炭窯周辺のヒノキを選木して子供たちに伐採体験をさせました。受口や追口を作る意味、安全に木を倒す方法などについて、説明しながら行いました。伐採した材は炭焼用に玉切り

し、子供たちに炭窯の中へ詰めてもらいました。子供たちは皆初めての体験を楽しみながら作業していました。先生からも熱心な質問がありました。

実際に体験することで、自分たちの生活と身近な森との関わりを理解し、森林について体で学習してもらうことができたと思います。

森林教室を通じて、森林の機能を守り、吉野川上流域の豊かな自然環境を育む意識が子供たちに育ってくれたらと思います。

池田農林事務所　林務課
森林環境係



日和佐

間伐材魚礁の魚群探査について

日和佐農林事務所では、林業普及活動の一環として間伐材を利用した魚礁を設置しており、これまでに120基を沈設しています。

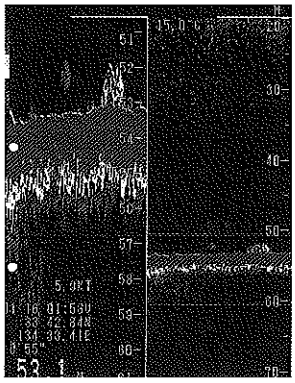
この魚礁がどの様な集魚効果があるのか確認するため、平成12年度に潜水調査を行いましたが、水深が約50mと深く、ダイバーが潜るには、時間的な制約があることから、十分な効果調査が実施できませんでした。

今年度は、水産試験場の協力で、調査船に装備している有線カメラを使用した潜水調査を実施してくれることになりました。1月16日、予備調査として魚群探知機による位置の確認を行いました。当日の水温は15度と低く、魚の活性が悪く探知機に反応するか心配されましたが、グラフのように魚群を探知することに成功しました。

（赤いラインの盛り上がり）

2月20日、有線カメラによる探査を実施し、2基の沈設を確認しましたが、古い魚礁は確認できず、小魚が群れている程度であったとの報告があり、3月も調査を予定しています。また、海部流域活性化センターが中心となり、水深の浅い海域に3基を沈設し、資材の異なる魚礁の追跡調査を行うこととしています。

日和佐農林事務所　藤友　毅



川島

美郷物産館「みさとや」オープン!!

平成十六年三月十四日、「みさとや」がオープンしました。

この施設は、美郷村が、地域の物産販売や観光PRと同時に、林業や木材をアピールするため、村単独で建設したもので、商工会が同居する形となっています。

構造は木造平屋建て、建築面積は一六二平方メートル、総工費約三六〇〇万円、木材使用量約六二立方メートルで、ほとんどが美郷のスギを使ったものです。

運営は、出品者二七名で構成される運営協議会（任意団体：将来は有限会社にする。）が、村から施設を借り受けて行っており、年間売上目標は、当面二〇〇〇万円としています。

展示販売品は、ウメ加工品、山菜、野菜・果物、シイタケ、漬け物、こんにゃく、スダチ・柚加工品、味噌、酒、茶、餅・団子、陶器、竹製品、カズラ細工、藍染め、和紙等となっており、一角では「The山師」手製のテーブルで、うどんやそば等簡単な食事も出来るようになっています。

近くにお越しの際は、ぜひ立ち寄って頂き、美郷の物産を買って、美郷のうまいそばを食べて、美郷の木材を使った建物を見て頂きたいものです。

川島農林事務所　高橋　幸次